

氏名	なかにし まなぶ 中西学
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲博制第 41 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
学位論文題目	<b>墨流しの研究</b>
作品テーマ	墨流しの応用としての作品「Luminous Flux」
論文題目	墨流しの研究
論文審査委員	主査 教授 絹谷幸二 副査 教授 横溝秀実 副査 教授 坪田政彦 副査 教授 山縣 熙

## 内容の要旨

中西学（以下申請者と略す）の研究テーマ、『墨流しの研究』についての要旨は以下の論旨となっている。

日本の伝統的技法である「墨流し」を申請者は本人の作品制作において応用しているが、この技法の無辺の流動性の中に、宇宙の時間的ゆらぎを感じ、新しい空間的形態を創出することが出来ると考えた。ここに研究テーマの動機があることをまず論じている。そして、申請者は墨流

しの研究を通じて、有機生命の根源的なかたちが水面上に現われる波動を和紙に定着しつつオーガニックな生命とは何か、宇宙のゆらぎとは何かと模索し続け、辿り着いた日本古来の「墨流し」の技法を現代美術の分野に新たな表現として立ち位置を確定したいとも考えた。

このための研究を進めるにあたり、墨流しの歴史や技法を考察し、墨流しの本人の作品制作に於ける時間と空間の問題をも考えてゆく。本論は、修了作品の表現形成として墨流しの独自性についての研究を主眼とし、墨流しが、いつ、どの様に発生したかを遡行し、墨流しの技法にみられる諸現象について考察している。この研究を進めることは、墨流しと日本の風土との関わりを明らかにすることだと認識し、この研究が単なる絵画制作上のものだけではなく、生れ育った「ふるさと」と自然を認知するものだと感じている。

第一章の「墨流しの歴史と技法」では、平安後期の王朝貴族の遊びとして墨流しの発生から推移について具体的に叙述している。

福井県越前墨流しの地を再々実地調査をし、この技法の分析をしている。さらに琳派と浮世絵の作例を挙げ、日本美術の中にみられる墨流しの応用を確認している。

又、本人の作品制作において墨流しを補うマーブリング（トルコのエブル、イタリアのマーブリング）と墨流しを比較検討し、その差異を比べ、我が国独自の墨流しの特徴を述べている。

第二章に於いては、墨流し制作時の、時間と空間とはどのようなものを思索し、前述のマーブリングのゆとりある時間と瞬間と刹那の時間の技術が要求される我が国の墨流しを、実技を通じて体現し、表現される模様と流体現象から墨流しにおける時間の推移を考察している。

又、墨流しの制作にあたっての空間の問題に対しては、人物と静物、物と物といった、様々な「関係」に焦点をあて、墨流しの空間の本質に迫っていった。

そしてこの古来の伝統的墨流しと、現代の写真表現とを比較し、瞬時の問題を、そして物体と被写体の関係から空間の問題を研究している。そして、墨流しの制作の時間と空間を「墨流しの時間と空間の射程」として論証している。

第三章の「墨流しの実践」では、作品の制作論を、修了作品における墨流しの位置とその展開

として述べ、作品の制作背景と特徴を記述している。

伝統的なこれらの墨流しを応用した本人の作品が、現代美術の表現としてどのような感覚を観る側に与えることが出来るのかを述べ、制作者と鑑賞者を結びつけることが可能なのかを考え、本論文をしめくくっている。

申請者の『墨流しの研究』は本文総字数 28073 字となっている。

## 審査結果の要旨

本論文の審査は1月13日14時15分より、大阪芸術大学32号館視聴覚室1で行われた。

又、この論文審査の前に、申請者の博士作品展（芸術情報センター展示ホール）で実技作品29点を参加全教官で確認し、論議を作者同席の上で行った。

論文審査では本人がまず墨流し研究の論文要旨を述べ、その後諸先生方の質疑をいただき、その質疑に対し答弁をくりかえした。

又、副査の先生方からは書面にて論文審査報告書をいただいたので、ここに記すことにする。

横溝秀実副査からのコメント。

論文について

申請者の論文『墨流しの研究』は各種文献、実地調査などを駆使し、墨流しの歴史や技法から始まり、日本の美意識との関係、時空間からの墨流しの分析、自作への詳細な記述は多岐にわたる力作と言える……と結ぶ。

又、作品について……は、申請者の作は、一見墨流しをしただけのような装飾的な作品に見えるが、よく見ると色々な仕掛けがされており、正統な絵画が目指されていたことがわかる。

どこもかしこもオールオーバーに見えるその画面は、不透明で淡い色彩の墨流しと透明で鮮やかな色彩のマーブルリングの対比による効果で奥行きが感じられる画面に仕立てられている。

それは異なる色彩の性格をうまく応用した空間構成と言え評価出来る……と横溝秀実副査は述べ、続いて……また画面をよく見ると縦や格子状にうっすらとした分割線が見える。これは墨流しやマーブリングを施した和紙をパネルに貼り付けた際に出来る重なりだと言う。申請者はこの分割線を画面を活性化させるためのアクセントに使用し、退屈なオールオーバーな画面をうまく回避していると言える。

そして続けて、社会に向けた発表も多く、全国各地の美術館や画廊での個展や企画展、ワークショップ、審査員、研究発表など社会的な活動も積極的であり、社会から一定の評価を得ていると述べ、以上の理由から総合的に判断して、申請者は学位（博士）にふさわしいと結んでいる。

横溝秀実副査のコメントは以上であるが 続いて、坪田政彦副査は次の様に述べている。

申請者は、大阪芸術大学卒業後、大作の立体作品で華々しくデビューし、その後も活躍を続け、作家としてのキャリアと作品は充分と言える程に評価されて来た。

今更という感じがしないでも無いが、作品の質は変化して来た。近年平面作品が多くなり、申請者の興味は遊びの楽しみ方を変容させ、より精神を高めたい思いからと考える。

申請者論文の題目にも墨流しの研究とあるように、制作でも墨流しの発展形の作品を制作し、和紙にアクリル絵具を使用するなどポリエステル透明樹脂とのミクストメディアによる作品は、墨流し、マーブリング、デカルコマニーを思わせる手法での制作方法で模索し、宇宙を感じさせることを開花させ、自己のオリジナリティを獲得してきたように思う……と論者は、申請者の作品を認め、続いて……また、多くのワークショップ、デモンストレーション、ボランティア活動にも参加する姿勢は、今後が楽しみな作家と言えるとして述べ、前述の横溝秀実副査と同様な評価を下し、論文に関しても、山縣熙先生の指導のもと粘り強く、一定の成果を得られたようであると坪田政彦副査は申請者を評価して氏のコメントを結んでいる。

続いて、申請者の論文を一字一句でいねいに指導いただいた山縣熙副査は以下の様に記している。

文章表現上の問題点、定義付け不明確なまま使用されている専門用語、文脈から見て必然性を欠く引用文献など、様々な瑕疵を指摘できるが、そうした瑕疵は、申請者が論文などを書くという場を離れ、制作・実践を主とする場に長く身を置いてきたことに基因するものと思われる。

他方、長く制作の場に身を置いたが故にこそ可能であったと思われる、観察、考察、思索に基

づく記述が多くみられる。

殊に越前墨流しの「伝統工芸士」広場美治氏を取材し、その結果を記述報告している部分は、論文としてやや生硬な感を免れ難いが、そのデータそのものは貴重であり、それを基に、今後、申請者が墨流しの研究を深化させることが期待される。

以上の諸点から、これまで体系的な研究の存在しなかった「墨流しの研究」の端緒を開くものとして、本論文が学位（博士）を授与するに値するものと判断する。と山縣熙副査は結論づけている。

所で主査絹谷幸二は、論文・作品審査、そして諸先生方の意見及び本人申請者の論文と面接答弁・作品評価を総合的に判断することとなった。

論文については山縣熙副査の指導のもとにねばり強く行われたが、実作品制作者の立場から、「墨流し」という日本古来の伝統的な技法を現代絵画に応用しようとした動機が述べられ、「宇宙のゆらぎとは何か」又、有機生命の命の根源までもさぐろうとする論者は、まことに賞賛するに値するものと思う。

又、この様な墨流しの歴史や技法から、日本の美意識、ひいては古典と現在。水と油など相反する概念を双眼で見すえた論理など博士論文にふさわしいものと判断した。

作品に於いては、正にこの論文の論旨にうらづけされており、制作意欲もさかんであり、社会的にも研究発表をくりかえし続け、将来が楽しみな作家と言える。ただ、論文や学問に走ると作家としての手作業や感覚がにぶることも多々あるので注意が必要だろう。

この様に三副査からの報告・コメントもいただき、結論として申請者の論文審査を総合評価し、議論をつくした結果、合格とした。